

第21回宗教研究会

「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題（3）」

幡鎌一弘

2月18日に、「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題（3）」（第21回宗教研究会）を開催した。今回は、京都府立医科大学の棚次正和氏を講師に迎え、「生死と永久（とわ）の「いのち」一人間の存在構造の視点より」という報告を得た。

棚次氏は、現代日本における「死」をめぐる現象、たとえば、病院死・孤独死・虐待死、自殺の増加、臓器移植（脳死）、死の仮想現実化、葬送儀礼の省略・廃止などは、日本人が長年受容してきた既成の生命観・人生観が根底から揺らぎ始め、生の見方にも変化が起きていることを示すという問題関心から議論を出発させた。その際、棚次氏は、「人間は死んでも死なない」、つまり可死性と不死性の矛盾する両面を持っているというテーゼを提示する。人間の生死の問題を考えるにあたっては、この問題の解明が重要であり、具体的には、スピリチュアルケアの場での「生死」の問題を念頭に問題を掘り下げた。

棚次氏は、人間の実存を制約する根本条件としての、「時間」「空間」「人間（じんかん）」を取り上げた。人間は、生から死までという時間に制約された存在であり、「私の身体」が置かれている、「ここで」世界（自然）と切り結んでいる。思考や知覚など、身体性は自然環境と相互作用を通して形成されるものであり、身体と風土は不可分となる。しかも人間とは人と人との間柄（人間・じんかん）において生きるものであり、社会化は自己と他者の関係性の総体である人間（じんかん）で達成される。自己は他者と異なるが、相異なる他者として繋がりがあって形成されるのである。時間・空間・人間（じんかん）は、実存の根本条件であるが、逆に一種の構造的限界が含まれることになる。

スピリチュアルペインは、自己が他なるものと切り結ぶ諸関係の歪みに起因する病苦であり、その歪みを修正して調和へと導くことが要請される。たとえば、死を超越している自己への目覚め、外なる自然と内なる自然（身体）との調和ないし自然との一体感の回復、他者との関係の和解・修復、他者あるいは自己自身に対する愛とゆるしなどである。

さらに、人性三分説（人間の存在構造を霊・心・身という三重の次元を有するものとしてみる）により、人間は死すべき存在であると同時に不死なる存在（霊を本有する存在）としてとらえることが可能になる。また、三重性は、他界へ移行する主体とその他界に住む根元的な主体の自我との統合という問題と密接に関係するとし、さらに実在と現象あるいは絶対と無限の相互関係というところまで言及された。

このような、棚次氏の問いかけに対して、幡鎌は、天理教における身体・心・たましいの三分説を踏まえたうえで、自己内部の他者性（霊の次元）をどのように考えるのか、あるいは「歪みのない調和」とはどのような状態（理想形）か、という疑問を問いかけた。また、参加者からは、多様な宗教・哲学における三分説の心と魂の指し示すものは何かという質問などがあり、活発に議論が行われた。

第246回研究報告会

西谷啓治の「空」の論理とその構造

標記研究会が、2月24日開催された。報告者はファン・ホセ・ロペス・パソスさんと、サンティアゴ・デ・コンポステラ大学博士課程に在学し、現在天理大学宗教学科研究員として日本に留学中、西谷哲学については、京都大学でも研鑽を積んでいる。

1. 西谷宗教哲学における西洋哲学からの影響、2. 「空」における本質の問題、3. 本質と現象の世界との関係、4. 我の存在の問題という道筋で西谷啓治の「空」の構造について論じた。

西谷啓治（1900～1990）は、京都大学で、西田幾多郎に師事し、大学卒業後の1936年フランスに留学し、ベルクソンに学ぼうとするが、健康不良のため実現せず、ドイツでハイデッガーに師事、ニーチェについての講義を2年間受け、その影響は西谷の『ニヒリズム』に認められることを指摘。

西洋ニヒリズムからの影響として、ヘーゲルの絶対的観念論から生まれた「ニヒリズム」、ショーペンハウアーの意志と表象としての世界（神は人間の意志の名であり、この世界に存在するものは表象、幻にすぎない）、キェルケゴールの虚無への恐怖、フォイエルバッハによる宗教批判、ハイデッガーのいう「死へ向かう存在」としての人間について簡述、ニーチェの「ニヒリズム」が西谷のニヒリズムの中核となったことを説明。ニーチェは西洋文化を批判し、キリスト教と哲学は真理を研究したが、見つけられなかったとした。いずれにせよ、これら西洋におけるニヒリズムは「有」に対して生まれたもので、これに対して「相対無」とか「絶対無」を指定しないで、西谷は「空」を使用した。

次に西谷が「空」を選んだ理由として、『宗教とは何か』を引用し、「空は虚無が『無化』（Nichtung）の場であるのに対して、『有化』（Ichtung）の場ともいえるのであろう。そういう有化の場は、ニーチェ的にいえば、すべてのものに対して、『然り』を言い得る、大きな肯定の場である」ことを挙げた。

また、西谷宗教哲学の立場として、宗教における「体験」は「脱自」した生であって、生そのものの根源的な獲得を意味するとした。その上で宗教と哲学の関係について、東洋の見方と西洋の見方に敷衍させ、その共通性と相違を示し、西谷がいう「宗教的靈性」に言及。

「空」の本質の問題については、まず、「もの」の本質を知るため、その「もの」の場から見なければならないという西谷は、一つの「もの」の本質に、すべての「もの」の本質が存在すると結論づけたことを概説。そして本質と現象世界の関係を示すために、2つの同心円と外の円に接する接線を図示し、内側の円が感性の現象世界、外側の円が知性の現象世界、半径無限大のとき中心であって中心でなくなる円の中心が「周辺なき中心」「のみの中心」すなわち、「空の場」であると示した。つまり、すべての「もの」は「有即無」「無即有」として存在し、「空の場」においては、「もの」と「我」が回互的な関係存在としてある等について説明があった、その後、質疑となった。

（文責：堀内みどり）

台湾出張報告

佐藤浩司

3月6日より3月9日まで、伝道史料室として台湾へ出張した。今回の出張は、3つの目的があった。第1は、台湾伝道史編纂に関すること、第2は、第1とも関連することで、中山正善二代真柱の台湾巡教に関すること、第3は、現地の宗教事情調査である。

第1については、台湾伝道庁前任の橋本庁長より、伝道庁の70周年を迎えるに当たり、台湾における天理教の伝道についてその歴史と現況を記録し、出版したいとの希望があった。特に、戦前の伝道について公的機関などにある史料を探索する仕事をおやさと研究所に託したいとの要請があり、おやさと研究所として行ってきたものである。台湾における戦後の歴史と現況については、担当者も決まり、現地で資料の調査収集と執筆をすることになっていた。ところが、諸般の事情により、進捗がみられず、今日に到っていたので、元庁長であった三濱先生が新たに庁長として赴任されたのを契機として、この度、台湾伝道史の編纂の議が提起され、3月6日、その第1回目の会議が伝道庁で開催されたのである。

この会議には、三濱庁長他、台湾在住の5名の方に加えて、おやさと研究所として、中国文化大学へ交換教授として赴任している金子昭氏と佐藤が出席した。この会議では、前回企画された伝道史の編纂の顛末について担当者から報告があり、その後、編纂理念、方針、内容、進め方について自由な討議が重ねられた。討議の中で、三濱庁長より、伝道史は長期的の展望をもって正確な内容のものにしたい、当面、80周年記念祭に向けては、『中文天理』など既刊のものを元に再編し、読みものとなるものを作成したいとの提案があった。このことを踏まえて今回の会議では次の4点を確認するにいたった。

- ① 正確な記録としての伝道史の作成は今後、息の長い作業になる。
- ② 上記伝道史とは別に、『中文天理』等を踏まえた副読本を、80周年の記念品として作成するという事も考えられる。
- ③ 戦前の台湾伝道史については、おやさと研究所が担当する。
- ④ 戦後の台湾伝道史については、アンケート調査等をもとに今後検討していく。

(以上、金子昭氏作成会議メモより)

おやさと研究所としては、これまでの戦前の資料の調査収集に加えて、戦前の伝道史の執筆を担当することと、戦後の台湾伝道における現地行政との対応や文化的活動などについて調査執筆することになった。

第2の目的である二代真柱の台湾巡教の跡を辿り、その思いを確認する作業として、今回は、昭和12年1月に執行された台湾伝道庁鎮座祭、奉告祭の後、3日間で台湾を一周した足跡の中から、高雄周辺、特に高雄駅、旧高雄神社(現、高雄忠烈祠)を訪問した。二代真柱は、現地教会への巡教が、訪問の第一目的であったようであるが、その他、土地の官庁への表敬、現地の中心的な産業となっている工場等の視察と共に、現地の神社への正式参拝を行っている。台北その他の神社でもそうであるが、神社はその土地の風光明媚な一等地に建てられている。元高雄神社があったところも高雄市内と高雄港を一望にできる高台(日本時代は打鼓山と呼んでおり、現在は壽山と呼称している)にあった。現在は、戦没兵士をお祀りする忠烈祠が設けられている。神社の建物はすでにない。かつては灯籠や記念碑であった石づくりの構造物はそのまま置か

れていたが、ご多分に漏れず、刻字はセメントで埋められて読めないようになっていた。ただし、一部、意図的にセメントを剥がしている箇所が、しかも最近施されたと思われる形跡であるのが興味深かった。

第3の現地の宗教調査として、忠烈祠のある高台は、現在「壽山公園」となっており、東屋が設けられ散策できるコースとなっている。この山中に、法興禅寺と元亨寺という禅宗の寺院が2カ所ある。法興禅寺は戦後に設けられた新しいお寺で、住持は、対外活動を積極的に行うことで知られた方の方である。訪問の折には、建物に施錠がされており、人の気配がなかった。一方、元亨寺は、堂塔も数多く建てられ、ここに生活しながら奉仕する僧侶だけでも200人はいるという大寺である。大雄宝殿には、正面に釈迦、阿弥陀、薬師の3如来、その両脇に普賢、文殊の2菩薩が鎮座していた。上席の尼僧と思われる旭慧師にいろいろとお話を伺うことができた。信者会館や学校経営などかなりの規模を維持するには、相当の経費がかかると思われるが、ほとんどが信者の喜納で成り立っているようである。台湾の人々を惹きつけ魅了する信仰について、深く考えさせられた。僅かな日程の中で、お陰で充実した時間を過ごすことができた。

(2頁からの続き)

【註】

- (1) 現在は大連市金州区。
- (2) 当時の大連市街図を見ると、「西通り」は当時の大連の中心部にあった「大広場」と呼ばれるロータリーから西(正確にはやや南西)に延びる道に「西通」という地名が見られる。ちなみに東(正確にはやや北東)に延びる道には「山縣通」と記されている。また、南に向かう道には「播磨町」と記され、北に向かう道は、現在筆者の目にできる市街図には地名が記されていないが、「奥町」であると思われる。奥町は翌年の昭和13年に吉原氏が最初に布教所を設置した間借りの部屋のあった所である。
- (3) 丸山時次氏は理実分教会初代会長で、吉原氏の長兄・高橋本次郎氏の妻・久子の兄である。
- (4) 福田文雄氏は吉原氏と同郷で、後年、日光伝道班として妻と共に中国・開封へ布教に出るが、志半ばにして布教地で身上を思い出直してしまう。

(6頁からの続き)

法王も神に、イエス・キリストに仕える僕である。ヴァチカン内部にどんな動きがあろうと、任務を全うするために全力を尽くしているようだ。

今、ヴァチカンは4旬節の時期。それ故に議会は精神的訓練を行っている。2月27日から1週間は全員瞑想に専念した。この間法王はなにがしかの差し入れをすることを怠ってはいなかった。そして、枢機卿たちに次のように思考し、行動することを要請している。「福音の論理に入ること」「権力志向と名誉獲得志向を放棄すること」そして最後に「謙讓の精神の欠如は教会の統一を破戒するものだ」と締めくくった。

2月12日の日曜日のアングエルスのお話を引用しておこう。

「キリストの行為と言葉は救済の歴史でもある。神の意思がわたくしたちを救済するために受肉されたものだ。」

「私たちは浄化されねばならない。」

「神の愛は、あらゆる悪よりも、伝染病の悪よりも、凶悪な悪よりも遙かに強い。」

さらに2月19日には次のように語っている。

「全員が教会の中では信仰にすがるのである。あるいはその権威にすがるのである。自分自身のための信仰は本物ではない。」

天理大学 おやさと研究所 平成24年度公開教学講座

信仰に生きる 『逸話篇』に学ぶ(1)

教祖のご在世当時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰の世界の一端を明らかにしたいと思います。

本講座は、平成24年および平成25年の2カ年間、4月から11月（7月を除く）の毎月25日、午後1時から2時45分にかけて、道友社6階ホールで開催を予定しています。

平成24年度については、以下の内容で実施いたします。

4月25日(水)	7「真心の御供」	深谷忠一
5月25日(金)	25「七十五日の断食」	堀内みどり
6月25日(月)	10「えらい遠廻わりをして」	澤井義次
8月25日(土)	2「お言葉のある毎に」	幡鎌一弘
9月25日(火)	11「神が引き寄せた」	八木三郎
10月25日(木)	31「天の定規」	澤井義則
11月25日(日)	22「おふでさき御執筆」	安井幹夫

場所：天理教道友社6階ホール

時間：13：00～14：45

*お車でのお来場はご遠慮下さい。

グローバル天理

第13巻 第4号 (通巻148号)

2012(平成24)年4月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan